

主体的・協働的な学びを目指して

—— 交流を通じた「知」の探究 ——

飯室 毅

実践の経緯

文科省が、平成一九年に「学力の三要素」を提示したが、高校では目の前の大学入試に重点が注がれ、なかなか学力の三要素が満たされていない現状がある。しかし、国語教育においては、昔から多くの実践がなされていると考えられている。特に「主体性をもって多様な人々と協働する態度」あるいは意欲の育成は、「知識」や「思考力・判断力・表現力」という土台の上に成立しうるものと私は考えている。

平成二五年四月文科初等第一七号通知「高等学校等の新学習指導要領の実施に当たって」において、「生きる力」をはぐくむことを目指し、基礎的・基本的な知識、技能の確実な習得、課題の解決に必要な思考力、表現力、判断力等をはぐくむことを教育課程編成の原則としている。また、主体的に学習に取り組む態度を養うことや生徒との言語活動の充実を編成、実施に当たって配慮すべき事項（5（1））に挙げている。平成二四年六月文部科学省「言語活動の充実に関する指導事例集（高等学校版）」では、言語の役割を踏まえた言語活動の充実として、

- （1） 知的活動（論理や思考）に関すること
ア 事実等を正確に理解し、他者に的確に分かりやすく伝

える。

イ 事実等を解釈し、説明するとともに自分の考えをもつこと、さらに互いの考えを伝え合うことで自分や集団の考えを発展させる。（傍線：飯室）

とあり、知識を経験と結びつけ、意見と根拠、原因と結果などの関係、妥当性や信頼性の吟味、考えの根拠や前提の違い・特徴などを関連づけた効果的な言語活動を推奨している。

昨年の八月に公表された「中央教育審議会」の審議まとめ案によると、小中高校を通じて受け身の学びではなく、児童生徒が主体的に学ぶ「アクティブラーニング」の充実が示されている。私は、アクティブ・ラーニングで使われている「きょうどう」は、「力を合わせる」ニュアンスがある「協働（コラボレーション）」と捉え、自立した主体が力を合わせることで一つの課題を解決する「協働」と考えている。「協働」を行う場合、「個人」と「個人」との交流を通して課題解決に至る過程の中で、コミュニケーションは不可欠な要素である。そのコミュニケーションには、伝達型のコミュニケーションと、対話型コミュニケーションと言われるものがある。特に対話型コミュニケーションでは、会話のやり取りの中で、相手の反応によって次の発言が変わっ

てくる。私は、授業や思考のプロセスの中で、生徒自身が自分の言葉で、これまでの学びや体験と結びつけて主体的に知識を生み出す場を与えることにより、個々の「知識」の深化を図れると考えている。もちろん個人のレベルでも「知」の探究は可能だが、教育学の理論でいうところのヴィゴツキーの「発達の最近接領域」（一人で到達する水準よりもみんなで到達する水準の方が、可能性は広がる）を援用し、「知」の探究を組織化してみた。

1 「主体的な学び」から「協働的な学び」を目指す工夫

鶴田清司（2011）は、「根拠・理由・主張の三点セット」に注目し、「『根拠』となる客観的な事実・データは、誰にとっても開かれている。アクセスや取り出しが自由にできる。それに対して『理由づけ』は、なぜその証拠資料を選んだか、それをどのように解釈・推論したかという考えの筋道を示すものであり、人によって異なる可能性がある。同じデータを用いても正反対の主張が出てくることも珍しくない。」と述べている。そして、「自分の意見を発表し合い、それぞれの意見の根拠や理由を検討し合う学びが展開することによって、授業が対話的かつ協働的になり、学習者の思考が深まると述べている。

そこで「二月つごもりごろに」（『枕草子』）の清少納言の心情を考えるために「複数資料の重ね読み（明確な定義がないため大村はま以降の従来の「比べ読み」と呼んでもいい）」を取り入れ、まず学習者が「自己」の考えを「根拠」に基づいて持ち、その上で協働活動を通して「他者」とのものの見方・考え

方の違いに気づくことができる段階を設定する。

河野順子（2012）は、「自己が分離しているからこそ、同じ根拠である事実をとらえたとしても、その理由づけは異なり、それによって、個々の意見の対立が見られたり、それを前提とした協働・合意形成が見られたりするようになると述べている。

本実践の最終段階は、グループによる協働活動の中で、グループとしての見解を「根拠」と「理由づけ」で明示して、発表（書く）するという展開を試みた。

2 【授業実践の実際】

科目 「国語研究」（学校設定科目）

テキスト 数研出版 古典B 古文編

『枕草子』 「二月つごもりごろに」

補助テキスト

『無名草子』 「清少納言と紫式部」

『紫式部日記』 「同僚女房評」

『枕草子』 「大納言参り給ひて」

「中納言参り給ひて」

「雪のいと高う降りたるに」

対象 3年7組（理科）二四名（パート授業）

※補助テキストの「大納言参り給ひて」「中納言参り給ひて」「雪のいと高う降りたるに」は、2年次「古典B」にて既習。

(1) 「二月つごもりごろに」(『枕草子』)の初読後に、作者である清少納言の略歴を「大納言参り給ひて」「中納言参り給ひて」「雪のいと高う降りたるに」など既習作品に関連させて振り返り、また同時代の「女流文学の世界」を『最新国語便覧』(浜島書店)を用い、同時代的なものの考え方と現代のものとの考え方の違いなども確認した。その上で、本文(二月つごもりごろに 以下本文)の傍線部「宰相の御いらへをいかでかことなしびに言ひ出でむと心一つに苦しきを、御前に御覽せさせむとす礼ど」の清少納言の心情を類推する課題に各自取り組ませた。「宰相の御いらへ」「いかでかことなしびに言ひ出でむ」「心一つに苦しき」「御前に御覽せさせむとすれ」を口語訳するとは問題なくできたが、「ことなしびに言ひ出でむ」の心理やどうして「心一つに苦し」いのか、なぜ「御前に御覽せさせむとす」るのが分からないようであった。

(2) そこで、クラス全体を①同時代の『紫式部日記』の一節を提示したグループ、②後の時代の作品である『無名草子』の一節を提示したグループ、③既習の『枕草子』を基とするグループの3つに分け(全部で3グループ×2)、そこに描かれた「清少納言」の姿から、再度各自の考えをまとめさせた。その際、プリントAを配付し、自分の考えの「根拠」とした部分と、「理由づけ」を明記させた。

| | | | | | |
|-----------------------|---------------|--|--|---|--|
| 「根拠とする作品名」に見る「清少納言」の姿 | ① 私のイメージ (考え) | ② 「理由づけ」(なぜこの部分を選んだのか・この部分をどのように解釈したのかを書くこと) ③ 「根拠」とする部分(「根拠」となる客観的な事実・データ/ここでは作品の部分) | (3) 個人の考えがまとまったところで、グループに分かれて発表を行った(その際、プリントAの「②理由づけ」のみ隠れるようにしておく)。 『紫式部日記』 | ① 偉そうに漢詩の知識をひけらかしているが、ミスが多い女性。 ③ さばかりさかしたち、真名書き散らして侍るほども、よく見れば、まだいと足らぬこと多かり。 | 『無名草子』A ① 和歌は上手でないことを自覚していた人。 ③ 歌詠みの方こそ、元輔が女にて、さばかりなりけるほどよりは、優れざりけるとかやとおほゆる。『後拾遺』などにも、むげに少なく入りて侍るめり。みづからも思ひ知りて、申し讀ひて、さやうのことに交じり侍らざりけるにや。 |
|-----------------------|---------------|--|--|---|--|

プリントA

『無名草子』 B

- ①他の女房よりも優れた才覚を持った人。
- ②自己顕示欲が強い人。

③侍ひ給ひて、人より優なる者と思し召されたりけるほどのことどもは、『枕草子』といふものに、みづから書きあらはして侍れば、細かに申すに及ばず。

『無名草子』 C

- ①中宮定子のことを大事に思つて宮仕えをしていた気配りの人。
- ②かけても言ひ出でぬほどのいみじき心ばせなりけむ人

『枕草子』

- ①教養・機知に富んだ女性で、謙虚な人。

『紫式部日記』を根拠とするグループは、ほとんど清少納言に対してマイナス評価であった。「したり顔にいみじう侍りける人」「さかしだち」「真名書き散らし」や紫式部の「まだいと足らぬこと多かり」評を根拠として挙げ、当時の男性の教養であった「漢籍」や「漢字」の知識に通じた清少納言の姿を得意気な（高慢ちきな）女性と捉えている。根拠となる「紫式部日記」が、ライバル女房に対して手厳しい書き方になるのは当然であったからだろう。

『無名草子』を根拠とするグループは、前掲の『無名草子』

A B Cの「根拠」部分によって清少納言に対する評価は分かれている。その中で、無名草子Bの生徒たちは、同じ「根拠」の「侍ひ給ひて、人より優なる者と思し召されたりけるほどのことどもは、『枕草子』といふものに、みづから書きあらはして侍れば、細かに申すに及ばず」に対して、他の女房たちより優れた者に中宮定子から思われていたことは、『枕草子』の中、「雪のいと高う降りたるに」の「香炉峰の雪」のエピソードや「中納言参り給ひて」の「海月のななり」のエピソードからも分かるという意見のグループと、『枕草子』の中にわざわざ「みづから書きあらはす行為は、わざとらしさを感じさせる」「香炉峰の雪」「海月のななり」のエピソードは、できる女をアピールする自己顕示欲の強い女性という意見に分かれた。

『無名草子』Aのグループは、「歌詠みの方こそ、元輔が女にて、さばかりなりけるほどよりは、優れざりけるとかやとおほゆる。『後拾遺』などにも、むげに少なく入りて侍るめり。みづからも思ひ知りて、申し請ひて、さやうのことには交じり侍らざりけるにや。」の記述を基に、後世の人からも清少納言は和歌が上手ではなかったため、歌会等の機会を避けていたと評価されており、自己の才能の限界を自覚していた（身の程を知る）という考えが挙げられた。

既習「枕草子」を根拠とするグループは、各エピソードから機知に富んだ当意即妙という清少納言に対する一般的な女性像に終始し、「二月つごもりころに」の「御前に御覽せさせむ」の箇所にも、主人をたてる謙虚な女性という考えを挙げていた。

(4) グループでの各自の発表の後、グループ見解をまとめるための話し合いを行わせた(なぜ・どうしてを重視し、解釈した理由を問う)。互いの考えが生じた「理由づけ」を検討することで、根拠とする作品・部分だけでなく、自己の体験に影響されて理由づけを行っていることに気づくグループもあった。

『紫式部日記』を根拠とするグループは、既習の「香炉峰の雪」のエピソードを交えて、他の女房たちに比べ、「漢籍」素養に優れ、中宮定子の問いに当意即妙に対応する清少納言の姿を高慢ちきな女性とマイナス評価をしている。根拠の文に「香炉峰の雪」のエピソードを結びつけたことは、本来の「香炉峰の雪」の読みが『紫式部日記』の記述によって影響を受けていると考えられる。これは既習『枕草子』を根拠とするグループが、各エピソードから機知に富んだ当意即妙という清少納言に対する一般的な女性像に終始したと対称的である。

また『無名草子』を根拠とするグループは、根拠とする部分が異なることで、清少納言に対する評価が分かれてしまったが、「理由づけ」の中で、「歌人として有名であった父に対して、自分の歌人としての能力が劣っていると自覚していた清少納言は、主人である定子に助力を求めた。身の程をわかまえてい。」という意見のように根拠とする部分に影響された者がいる一方、既習の学習材に対する理解や自己の経験に結びつけて解釈したためであろう。

(5) 全体に発表したあとで、再度、本文傍線部での清少納言の心情をグループで考えてもらった(プリントB参照)。

A 私たちの清少納言像

B この時の清少納言の心情をまとめなさい。

・横に訳を書いてみよう

藤原公任宰相殿のお返事をどうして何気ないふりで詠み出せるだろうか
宰相の御いらへを いかでかことなしびに言ひ出でむ
と
と心一つに苦しきを、御前に御覽ぜさせむとすれど

C 心一つに苦しみ ↑誰が苦しいのか？
↑心一つ とは？

D 御前に／御覽ぜ／させ／む／と／すれ／ど

→ どうして「中宮様にご覧に入れる」のか？

自分たちのグループが持つ清少納言像に基づいて、藤原公任への返事(いい加減な返事はできない)に対するプレッシャーのかかった清少納言の心理状況が話し合われた。特に「優秀と評判であればあるほど、無様な格好は見せられない。」という意見は、生徒自身が小中学校時代から「できる子」と周囲から評価をされているため、学園祭等の行事でも「良いもの」を期待されている実体験に基づき、「ヘタなものは見せられない」という共感に繋がっている。

さらに「苦し」いの主格を考えると清少納言自身とわかるため、優れていると周囲から評価されている者が、同僚の女房に相談することは、自分の弱みをさらけ出すことになり、自己の

プリントB

プライドが傷つくことになるため、自分だけで苦慮する様子は、生徒達にはイメージしやすかった。「他の女房よりも優秀、デキる女、和歌が上手でない」などのこれまで出された意見も一人て苦悩する清少納言の心情の理由づけとされた。また、『山月記』の李徴を引き合いに出す者もいた。

最後に「どうして中宮様にご覧にいれるのか」という部分で、意見が分かれた。「一人で悩んでしまい、中宮に相談したかった」という意見と「ホウ・レン・ソウ」を徹底した女房として主人を立てる気配りで、『無名草子』にも書かれているという意見があった。さらに、一年間のアメリカ留学経験のある者が、「なぜ主人に相談する必要があるのか。自分に対して挑戦されたものである以上、自分で答えるのが筋ではないか。」という疑問を呈し、「既習の『枕草子』においても、自分の能力をアピールしている清少納言が、今回主人に相談する理由がわからない。」という意見に、他の生徒達も考えさせられた。

3 まとめ

本実践の主な成果は、以下の二点である。

第一は、各自が初発の問いかけに対して答えを見出せなかった学習者が、「複数資料の重ね読みを通じて」「自己」の考えを「根拠」に基づいて「理由づけ」を行う中で持ち、その上で協働活動を通して「他者」のものの方・考え方の違いに気づくことができた点である。学習者の主体は、無意識のうちに培われるものではなく、「自己」と「他者」との関係性の中で育まれていく。主体が育つことで「自己」意識が高まり、客観的に「自

己」を見つめるようになってくる。主体を育てる手立てを意図的に仕掛けることは、「知」の探究には有効であろう。

第二は、「理由づけ」説明過程で、自己の生活体験（現代）を古典作品の中に生きる人物と関係づけた上で、他者とのコミュニケーションが形成できた点である。学習者が教材との交流、自分の生活体験や知識との交流、友人との交流の相互作用を通して、テキストの意味を再構築するメタ認知的な学び（友人に語ることを通して、自己の思考プロセスを振り返り客観視することで自己の学びに変化を与える働き）も生じてくる。

このような協働による知の探究をさらに深めていくためには、もう一段の仕掛けが必要となるかもしれない。「複数資料の重ね読み」と体験知の融合によって形作られた清少納言のイメージに、さらにもう一冊のテキストを加えた時、どのような作用が生じてくるか、新たな学びの可能性が考えられる。

4 今後の課題

本実践は、少人数の利点と系統的な指導の積み重ねの賜でもある。平成三十二年度から実施が予定されている「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」では、考える力を問う方向が明示されている。実際、現代文などにおいて、社会や自分との関わりの中で考える力を育てる実践は数多くなされているが、伝統や文化に関する教育において、文法や単語、古典世界の慣習と現代の言葉との違いが大きく、学習者にとって壁となっている。しかし、古典を現代との関わりで読むことも、考える力を育てる有効な手立てである。そのためには、考える基礎として

の古典常識、語彙力、文法力は、古典作品にアプローチする上で必要な能力であると私は考えている。ベースとなる言語能力を培い、現代と古典との相違を理解することで、真に古典に深い関心を寄せ、主体的に追求する者が生まれてくる。こうした生徒を多く育てるためにも、古典教育を用いて、交流を通じた知の探究を目指していきたい。

追記

本校は、山梨県東南部の富士北麓地域にあり、「純剛」と「百折不撓」を校訓として「文武両道」を目指す普通高校である。「普通科」と「理数科」を併設し、地域からは進学校として期待をされている。

本校には、二十代に一度赴任し、その後上越教育大学大学院で学び、四十代で再度赴任し今年で七年目となる（現在は進路指導主事を務めている）。本実践は、三年「理数科」の国語研究（学校設定科目）での実践をまとめたものである。

「理数科」は、難関大学進学を目指した科として一クラス四〇名で構成されている（生徒のほとんどが国立公立大学に入学しており、東大・京大などの最難関大学にも毎年進学者を輩出している）。内、文系生徒は八名、理系生徒は三二名である。授業は二パートに分かれており、本実践生徒は上位層（進研偏差値六十以上）に位置する生徒達二四名である。一年次に古文読解の基礎となる文法や基本古語を習得し、主体・客体の関係、主―述の関係、省略語の補充等を徹底的に意識させてきた。二年次には、古文の全体読解（スピードリーディング）と一部の

逐語訳中心に動作―心情の変化関係を捉える学習や場面のイメージ化、古典常識（知識）の確認を中心に展開してきた。この積み重ねの上に、本実践は位置している。

【参考】

以下の文章は、数研出版 古典B 古文編の教科書に依る。

「二月つごもりごろに」（枕草子）

傍線：飯室

二月つごもりごろに、風いたう吹きて、空いみじう黒きに、雪少しうち散りたるほど、黒戸に主殿寮来て、「かうて候ふ。」と言へば、寄りたるに、「これ、公任の宰相殿の。」とてあるを見れば、懐紙に、

少し春ある心地こそすれ

とあるは、げに今日のけしきにいとよう合ひたる、これが本は、いかでかつくべからむと思ひわづらひぬ。「誰々か。」と問へば、「それそれ。」と言ふ。みないと恥づかしきなかに、宰相の御いらへをいかでかことなしびに言ひ出でむと心一つに苦しきを、御前に御覽せさせむとすれど、上のおはしまして、大殿籠もりたり。主殿寮は、「とくとく。」と言ふ。げに遅うさへあらむは、いと取りどころなければ、さはれとて、

空寒み花にまがへて散る雪に

とわななくわななく書きて、取らせて、いかに思ふらむとわびし。

これがことを聞かばやと思ふに、そしられたらば聞かじとおぼゆるを、「俊賢の宰相など、『なほ内侍に奏してなさむ。』と

なむ定め給ひし。」とばかりぞ、左兵衛督の中将におはせし、語り給ひし。

「同僚女房評」(『紫式部日記』)

清少納言こそ、したり顔にいみじう侍りける人。さばかりさかしだち、真名書き散らして侍るほども、よく見れば、まだいと足らぬこと多かり。かく、人にことならむと思ひ好める人は、必ず見劣りし、行く末うたてのみ侍れば、艶になりぬる人は、いとすこすずるなる折も、ものあはれにすすみ、をかききことも見すぐさぬほどに、おのづからさるまじくあだなるさまにもなるに侍るべし。そのあだになりぬる人の果て、いかでかはよく侍らむ。

「清少納言と紫式部」(『無名草子』)

「すべて、余りになりぬる人の、そのままにて侍る例、ありがたきわざにこそあめれ。

松垣の子、清少納言は、一条院の位の御時、中関白、世をしらせ給ひけるはじめ、皇太后宮の時めかせ給ふ盛りに侍ひ給ひて、人より優なる者と思し召されたりけるほどのことどもは、『枕草子』といふものに、みづから書きあらはして侍れば、細かに申すに及はず。歌詠みの方こそ、元輔が女にて、さばかりなりけるほどよりは、優れざりけるとかやとおほゆる。『後拾遺』などにも、むげに少なく入りて侍るめり。みづからも思ひ知りて、申し請ひて、さやうのことは交じり侍らざりけるにや。さらでは、いとみじかりけるものにこそあめれ。

その『枕草子』こそ、心のほど見えて、いとをかしう侍れ。さばかりをかしうも、あはれにも、いみじくも、めでたくもあることども、残らず書き記したる中に、宮のめでたく盛り時に時めかせ給ひしことばかりを、身の毛も立つばかり書き出でて、関白殿失せ給ひ、内大臣流され給ひなどせしほどの衰へをば、かけても言ひ出でぬほどのいみじき心ばせなりけむ人の、はかばかしきよすがなどもなかりけるにや、乳母の子なりける者に具して、遥かなる田舎にまかりて住みけるに、襖などいふもの干しに、外に出づとて、『昔の直衣姿こそ忘れね』と独りごちけるを見侍りければ、あやしの衣着て、つづりといふもの帽子にして侍りけるこそ、いとあはれなれ。まことに、いかに昔恋しかりけむ。」

【引用文献】

・鶴田清司「論理的な思考力・表現力を育てるために―論証における「根拠」と「理由」の区別―」『国語の授業』(二二五号)、児童言語研究会、二〇一一年 pp.34-39

・河野順子『対談』で広がる子どもたちの学び―授業で論理力を育てる試み―、明治図書出版、二〇一二年 p.95-124,236

おわりに

平成十一年に下西善三郎先生の古典ゼミで御指導を受けた。大学院の面接試験の際に、高校現場で感じていた課題をいくつか挙げていた私に対して、「きみは、何をしたいのかね」と切り込んできた先生の言葉は、今でも覚えている。その後、

先生には文学研究の奥深さを御教示いただいた。大学院時代は、古典文学ゼミにおいて文学作品と格闘しながら、文学研究を国語教育に活かす道を模索し、現在に至っている。今後も下西善三郎先生に贈られた「学而不思則罔、思而不学則殆」を胸に精進して行きたい。

（山梨県立吉田高等学校教諭 平成十一年修了）